12　次の文章は、平重盛について書かれたものである。これを読んで、問１～５に答えよ。　　　　　　　　　　　　　　　〈神戸大〉二〇二一年度出題

　このは不思議の人にて、未来のことをも、かねてさとりたまひけるにや、去んぬる四月七日の夢に見たまひけるこそ不思議なれ。たとへば、いづくとも知らぬをはるばると歩み行きたまふほどに、道の傍らに大きなる鳥居のありけるを、「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひたまへば、「大明神の御鳥居なり」と申す。人多く群集したり。その中に法師の首を一つ差し上げたり。「さてあの首はいかに」と問ひたまへば、「これは平家太政入道殿、悪行超過したまへるによつて、当社大明神の召し捕らせたまひて候」と申すと覚えて、夢うちさめ、「当家は・よりこのかた、の朝敵を平らげて、身に余り、かたじけなく一天の君の御として、一族の昇進六十余人、二十余年のこのかたは、楽しみ栄え、申すはかりもなかりつるに、入道の悪行超過せるによつて、一門の運命すでに尽きんずるにこそ」と、来し方行く末のことどもおぼしめし続けて、（Ａ）御涙にむせばせたまふ。

　をりふし、妻戸をほとほとと打ちたたく。「誰そ。あれ聞け」とのたまへば、「太郎が参つて候」と申す。「いかに、何事ぞ」とのたまへば、「ただ今不思議のこと候ひて、夜の明け候はんが遅う覚え候ふ間、申さんがために参つて候。①御前の人をのけられ候へ」と申しければ、大臣、人をはるかにのけて、御対面あり。さて兼康見たりける夢のやうを、始めより終はりまで詳しう語り申し〔　　ａ　　〕が、大臣の御覧じたりける御夢に少しもたがはず。さてこそ、瀬尾太郎兼康をば、にも通じたるものにてありけりと、大臣も感じたまひけれ。

　その、、院の御所へ参らんとて出でさせたまひたりけるを、大臣呼び奉りて、「人の親の身として、かやうのことを申せば、きはめてをこがましけれども、は、人の子どもの中には優れて見えたまふなり。但しこの世の中の有り様、いかがあらむずらんと、心細うこそ覚ゆれ。はないか。少将に酒勧めよ」とのたまへば、貞能御酌に参りたり。「このをば、まづ少将にこそ取らせたけれども、②親より先にはよも飲みたまはじなれば、重盛まづ取り上げて、少将にささん」とて、三度受けて、少将にぞさされ〔　　ｂ　　〕。少将また三度受けたまふとき、「いかに貞能、（Ｂ）せよ」とのたまへば、かしこまつて承り、錦の袋に入れたる御太刀を取り出だす。「あはれ、これは家に伝はれるといふ太刀やらん」など、よにうれしげに思ひて見たまふところに、さはなくして、大臣葬のとき用ゐるの太刀にてぞありける。その時少将けしき変はつて、よにいまはしげに見たまひければ、大臣涙をはらはらと流して、「いかに少将、それは貞能がとがにもあらず。そのゆゑはいかにといふに、この太刀は大臣葬のとき用ゐる無文の太刀なり。入道③いかにもおはせんとき、重盛がはいて供せんとて持ちたりつれども、今は重盛、入道殿に先立ち奉らんずれば、御辺に奉るなり」とぞのたまひける。少将これを聞きたまひて、とかくの返事にも及ばず、涙にむせびうつぶして、その日は出仕もしたまはず、④引きかづきてぞふしたまふ。その後大臣熊野へ参り、下向して病つき、幾ほどもなくして、つひにせたまひけるにこそ、げにもと思ひ知られ〔　　ｃ　　〕。

（『平家物語』より）

〔注〕　○この大臣――平重盛のこと。

○春日大明神――現在の奈良市にある春日大社。

○平家太政入道――平清盛。重盛の父。

○一天の君――天皇の尊称。

○妻戸――出入り口の両開きの戸。

○瀬尾太郎兼康――清盛に仕え、活躍した武士。

○御辺――代名詞。そなた。

○貞能――平貞能。重盛に仕えた。

○無文――絵や彫刻などの装飾が施されていないこと。

問１　傍線部①～④を現代語訳せよ。③は、具体的な内容を明らかにすること。

◎問２　傍線部（Ａ）「御涙にむせばせたまふ」について、その理由を五〇字以内で説明せよ。

問３　傍線部（Ｂ）「引出物」について、

⑴　その中身は何であったか、本文中から五字程度で抜き出せ。

⑵　これに込められた重盛の意図を、六〇字以内で説明せよ。

問４　空欄ａ～ｃには、助動詞「けり」が入る。適切な活用形に直して答えよ。

問５　『平家物語』と同じジャンルの文学作品を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

　　イ　『海道記』　　ロ　『源氏物語』　　ハ　『国性爺合戦』

　　ニ　『太平記』　　ホ　『徒然草』

【解答と採点基準】

問１　①＝Ａ大臣の御前に控えている人々を Ｂ下がらせなさってくださいませ

Ａ＝４〔「御前の人」が具体化できていればよい。〕

Ｂ＝６〔尊敬、丁寧の訳出がなければそれぞれ減点２。〕

　　　②＝Ａ親である私より先には Ｂまさか Ｃお飲みにならないであろうから

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝６

Ｂ・Ｃの「よも～じ」が「まさか～ないだろう」「決して～ないだろう」という呼応の表現として訳出できていなければ全体０。

Ｃの尊敬、打消推量、断定、理由条件の訳出がなければそれぞれ減点２。

　　　③＝お亡くなりになるような時

「死ぬ」に当たる表現がなければ全体０。尊敬の訳出がなければ減点２。

　　　④＝Ａ頭から衣を引きかぶって Ｂ伏しなさる

Ａ＝６〔「衣を」に当たる語がなければ減点２。〕

Ｂ＝４〔「伏す」は「横になる」も可。尊敬の訳出がなければ減点２。〕

問２　Ａ栄華を極めた平家一門が、Ｂ父清盛の度を超えた悪行のために Ｃ滅ぶことを夢から予見し、Ｄ悲しく思われたから。（49字）

Ａ＝３〔「平家一門の栄華」にあたる表現があればよい。〕

Ｂ＝２

Ｃ＝３〔「平家一門の滅亡」にあたる表現があればよい。〕

Ｄ＝２〔文末が「から」でなければ減点１。〕

問３　⑴＝無文の太刀（5字）

　　　⑵＝Ａ自分は入道よりも先に死ぬであろうから、Ｂ父の葬儀で身につけるはずだった太刀を、Ｃ息子の維盛に託しておきたいという意図。（57字）

　　　［別解］Ｂ父の葬儀で帯刀するはずだった太刀を Ｃ息子の維盛に託すことで、Ａ自身の死期と平家一門の滅亡が近いことを維盛に伝えるという意図。（60字）

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４

入道と重盛、重盛と維盛がそれぞれ父子関係であることを示していなければ、それぞれ減点２。

問４　ａ＝ける　　ｂ＝ける　　ｃ＝けれ

問５　ニ

【現代語訳】

　生まれつきこの大臣（＝内大臣重盛）は不思議な人で、未来のことも、前もって悟っておられたのだろうか、去る四月七日の夢に御覧になったことは（実に）不思議である。詳しく述べると、どこともわからない浜辺の路をはるばると歩いて行きなさるうちに、道のほとりに大きな鳥居があったので、「あれはどういう鳥居だろうか」とお尋ねになると、（問われた人が）「春日大明神の御鳥居である」と申す。人が多く集まっている。その中に法師の首を一つ差し上げている。「それであの首はどうしたのか」とお尋ねになると、「これは平家太政入道殿が、あまりに悪行が過ぎておられたので、 春日神社の大明神がお捕らえになります」と申すと思われて、（そこで）夢からさめ、「平家は保元・平治の乱以来、たびたび朝敵を平定し、褒賞は身に余るほどで、畏れ多くも天皇の母方の御親戚として、一族の（中で）昇進（した者）は六十余人、この二十年あまりは、富み栄えることは、ことばに申しようもなかったのに、入道の悪行があまりに多かったために、一門の運命はもはや尽きてしまうにちがいない」と、過去・未来の事をあれこれとお考え続けになって、御涙にむせびなさる。

　ちょうどその時、（何者かが）妻戸をとんとんと叩く。（重盛が）「誰だ。あれ（＝戸を叩いている者の名）を聞け」とおっしゃると、「瀬尾太郎兼康が参っております」と申し上げる。「どうした、何事だ」とおっしゃるので（取り次ぐと）、「ただ今不思議な事がございまして、夜が明けますのが遅く思われますので、（それを）申すために参ったのです。問１①（大臣の）御前に控えている人々を下がらせなさってくださいませ」と申したので、大臣は、人を遠ざけて、（兼康に）お会いになる。そこで兼康は見た夢のありさまを、 始めから終わりまで詳しくお話し申し上げたところ、大臣の御覧になった夢と少しも違わない。そこで、瀬尾太郎兼康のことを、神霊にも通じている者であったのだなと、大臣も感心なさった。

　その翌朝、（大臣の）嫡子である権亮少将維盛が、院の御所へ参上しようと思ってお出かけになったところを、大臣はお呼び申し上げて、「人の親の身で、こんな事を申すと、非常に愚かなようだが、そなたは、人の子供の中ではすぐれておられるように見えるのだ。だがこの世の中のありさまは、どうなるのであろうかと、心細く思われる。貞能はいないか。少将に酒を勧めよ」とおっしゃると、貞能がお酌をするために参った。「この盃を、まず少将に取らせたいけれども、問１②親（である私）より先にはまさかお飲みにならないであろうから、重盛がまず取り上げてから、少将に注ごう」と、三度（ご自分で）受けてから、少将にお注ぎになった。少将がまた三度お受けになる時に、（大臣が）「おい貞能、引出物を出せ」とおっしゃると、（貞能は）畏まって承り、錦の袋に入れた御太刀を取り出す。「ああ、これはわが家に伝わっている小烏という太刀ではないだろうか」などと、（少将が）たいそううれしそうに思って見ていらっしゃると、そうではなくて、大臣の葬儀の時に用いる無文の太刀であった。その時少将は顔色が変わって、たいそう不吉そうに御覧になったので、大臣は涙をはらはらと流して、「これ少将、それは貞能の過ちでもない。そのわけはなぜかというと、この太刀は大臣の葬儀の時に用いる無文の太刀だ。入道が　　問１③お亡くなりになるような時は、重盛が身につけて（お棺の）お供をしようと思って持っていたが、今は（私）重盛が、入道殿より先にこの世を去り申し上げるであろうから、そなたに差し上げるのだ」とおっしゃった。少将はこれをお聞きになって、なんとも返事もできず、涙にくれてうつむいて、その日は出仕もなさらず、問１④（頭から衣を）引きかぶって伏しなさる。その後大臣は熊野へ参詣し、帰ってから病気になり、間もなく、とうとうお亡くなりになったので、（少将はそこではじめて）なるほど（父は自身の死期を察知していたのだな）とご理解なさったのであった。